

米軍ヘリの銃撃映像

2007年7月に起きた米軍ヘリによるテレビ局取材チーム銃撃の様子が、内部告発サイトで公開された。手にしたビデオカメラを武器と勘違いして銃撃したとして、過失はまったく問われない模様。

文／伊藤和子 Text by Kazuko ITO 写真／AFP・時事通信社 Photo by AFP-jiji



内部告発サイト「WikiLeaks」が公開した、2007年7月に米軍の攻撃ヘリコプターが路上の人びとを銃撃する様子を空撮した映像。2010年4月5日公開

いとう・かずこ

弁護士。早大卒。女性の権利、冤罪事件、公害訴訟などに取り組む。2006年、国際人権NGO「ヒューマンライツ・ナウ」(<http://www.ngo-hrn.org/>)を設立、事務局長に就任。著書「イラク「人質」事件と自己責任論」(共著/大月書店)ほか。

市民を標的にする米軍

2007年7月にイラクのバグダッドで米軍の攻撃ヘリコプターが路上の人びとを銃撃する様子を撮影した極秘映像が公開された。

バグダッドの町をいつものように歩く市民の中にカメラを持ったロイターの記者がいた。上空からバグダッドを監視していた米軍パイロットは、「武器を持っている」と勘違いし、発砲許可を得て、一斉に機関銃を連続発射した。倒れる人、息絶える人、そして逃げまどう人々。しばらくして、車で救助に駆けつけた人たちにも米軍は機関銃で攻撃、車に乗っていた子どもたちまで傷を負った。

なにか不審なものを持っていればためらわずに上空から攻撃し、人命を奪う、「疑わしきは即、空から射殺」の論理。映像は、そうした民間人攻撃を米国が日常的に他国で行っていることを物語っている。今日もアフガニスタンをはじめ世界各地で同じことが繰り返され、罪もない市民が虫けらのように米軍に命を奪われている。この告発映像は、元米兵が世界に米軍の実態を伝えようとしたのだろう。

民間人攻撃はジュネーブ条約に違反する戦争犯罪である。繰り返される戦争犯罪の責任は、民間人の犠牲を「誤爆」「悲劇」と片付けて顧みないオバマ大統領をはじめとする米政権にある。